

眞生

第二卷一月號

□宗教信仰を云ふ事は衣食にも事缺かぬ閑人のすることだ、特殊階級の遊戯、隱居仕事である、我々生活の道に遂はれてゐるものには寧ろ敵であると言ふ。

□そして信仰を得たと自稱してゐる者も、個人的安逸法悦に涵つて、順調な時丈けは佛のお慈悲を有難がつてゐる。だから宗教そのものは事實上、世間の長物、二次的のものとせられてゐる。

□併し宗教の意義が實際そこにあるものか。宗教は文化の中心である、信仰は個人生命の樞軸である、不動の衷心を腹の底に持ち得ない者は、逆境に押されると右へ仆れ、物欲に目眩んで左へ屈がむ、轉々常なく糠喜びに發狂し、悲嘆の除りには自殺する。

□古僧の田舎説教ぢやなくて、本當に如來に歸命した一念は總ての活動の源泉である。そして自己を健全に樹立し、應て一切を健全ならしめなくては己まぬ度生の大革命たらざるを得ない。宗教信仰は正に此實動そのものである。(尅)

新生の世界

土屋 觀 道

靜かに天地の運行を考察すれば昨日も今日も差したる變化も無いやうであるが、人類生活の氣分の中には昨日の急がしい年の暮れが今日の初日の目出度さを祝ふ元日もなるやうに、物は見やうで色々にも變はる有様である。

乍然斯くて暮れ行く人生の一生を靜かに反省し來る時、我等はいつも正月正月とのみは云つてゐられぬ時が來るではないか、そこに差しせまる人生の一生に來たるべき死に神の關門が開かれてあることを思ふ時、人の一生は果して眞實の幸福であらうか、生きとし生けるもの、必ず一度は通過せなければならぬかのやうに見える此の死の門が人生の最後に横はる時、果して私共は之を安々と見過して一生を度ることができ得るであらうか、死線を越えねば新生はない、死の彼岸に更らに死よりも大なる新生の世界があつてこそ初めて生死も超えるではなからうか。少くとも古來幾多の聖賢は此の死の門を超えてゐる。そうしてそこに死の門開け新生の世界は更らに一段の光輝を放つてゐる。そこには不死の生命輝き永遠無限の向上の一路が光つてゐる。

而も其の展開たるや其の人の人格の大なれば大なるほど其の人の世界は不死の世界に共通し、價値の生活に一致する、そこには無限の苦悶も横はりあらゆる世間の迫害もある、乍然此の苦悶も迫害も決して此の人を害することを得るものでない。一切の苦悶も迫害もいつかは反つて光となり反て是等其の莊

嚴となる、苦悶を破り迫害を拆け更らに進んでは理想實現の積極道に立つところ其處には永遠の生命と無限向上の一路とが開けて居る。乍然斯の如き力は何れの所より起つたものであらうか、吾人は之を釋迦孔子基督の如き一大偉人の一生に點驗し併せて古來幾多の宗教的偉人の生活に反省し來る時、そこに一大人生の苦悶と之が解決に全生命を捧げたる思想轉開の大道を見るのである。

乍然翻つて靜かに暮れ行く人生の一生を我等の上に顧みる時、果して我等は幾何の向上と永遠の生命とに生きやうとしてゐるであらうか、謂所人類生活の一生に度つて、果して幾何の眞の樂しみと望みと喜びと力との生活に立ち得るか、「人は一度は死すべきである」、斯く考へて尙光りあるもの幾人あらう。多くは何とは無く心の奥底に物足りない淋しさと、あき足らぬ腦みと苦しみとを感ぜずにはゐられない。永遠の光と無限の向上とがそこに必要ではあるまいか。そこには肉體の健康も力とならず、百千萬金も我を救ふには値いせぬ。而て王侯貴族の高位高官も到底本心の満足を得るものではない。

然に之を古來聖賢の踏み來りし所に見るに彼は遙かに生死を超越して限りなき永遠の光に生き上なき價値の向上に立つてゐる。生死も忘れ生死も離れて宇宙の大道に生きてゐる、多くの人々は自己の生命をのみ愛し一日も永からんとのみ急々たるに之等の人々の心の上には死を見ること歸するが如くむしろ身を殺して仁を爲すの姿である。あらゆる金錢も弊裡の如く、彼等の心には道のみである。乍然斯くの如きの生活がどうして彼等に現はれて來たのであらう。彼等の心に如何なれば斯くも不可思議の生活が現はれて來るのであらう。そこには謂知れぬ人類理想の神秘の世界があらねばならぬ。神の御國、佛の世界は即ち此の心の世界である。永遠の光に生きた人にして初めて永遠の生命となり、無量の慈光に

生きし人にして初めて慈愛の人となる。愛なきもの、宗教は眞の宗教ではない。亦價値に生きざる人生は永遠の生命ではないのである。然ば永遠の生命とは何であらうか。價値の生活とは何であらうか。此意味に於て吾人は更らに大なる人生々活の眞面目なる比判と反省とを要するものである。而も私は此の意味に於て人生々活の變化に於て三種の大なる轉化を見る。其の一は謂所肉慾の生活であつて主として肉身の生活安然をのみ主とした生活である、之は嘗に人類ばかりに止まらず一切の動植物に至るまで共通の生活であつて更らに分別すれば自己保存と種族保存との両面に現はれてゐる、前者は謂所生活問題となり後者は男女兩性の問題であつて一つは生活問題若は生存權としての社會問題となり一つは性慾問題戀愛問題として之又社會の主要問題となつてゐることは吾人の已に承知してゐる所である。然に此の二者は動植物の上にも共通な丈あつて、普通の人には殆んど本能的欲求として現はれてゐる所の強い欲望である。故に昔からも命あつての物種、背に腹はかへられぬ、逃るも四十八手の内、死んでも命のあるやうになどと謂れて來たのは正しく此の人類生命の根本要求より現はれたものといふべきであらう。又性慾の問題慈愛の問題に至つても此の道ばかりは確に人生思索の外にあるものゝやうであつて、之亦人間生活に離るべからざるものゝやうである。乍然此の外形的様式から此の二つを望めれば是等は主として一切の動物にまで共通する所の五感の對境を通しての生活であつて或は之を五感の生活若は肉慾の生活といふべく又他の動物と全々相違ないところを以つて之を見れば、動物的生活といふても不可ないことと思ふ。而して此の傾向の最なるは動物に於て之を見、人類に於ては未開人若くは幻少なる小供時代に於て此の傾向の甚しきを見、尙文明人といはれる人々の間にも此の欲望の全く磨消せる人とはあるま

いが主として智識階級若は人格主義的人々の中よりも無識階級若は非人格的人々の間に於て其の傾きが大きなるやうである。尤も私は此の二者の旺盛なるものを昔の正僧の如く之を卑いものであるとするものでもなく又どこまでも全々之を肯定しやうとするものでもないが、乍然少しく人生の一生を貫いて人類生活の向上と價値の生命とを反省し來る時果して吾人はこれ丈の生活を以つて全心の満足を得るものであらうか。若し此の動物的生活を以てのみ満足し得るものとするならば夫は全く人生をして單なる動物として見來るものであつて、謂所畜生と生を共にするものといはねばならぬ。乍然吾人は今やいつまでも單なる動物的生活を望むものではない更らに進んではそこに無限の生命と上なき人生の向上とを發見して此の一生をして眞の喜びと望みと力との中に全身活動に立たしむべく一生を反省するの時が來た。いは、昔の正僧的生活の如く此の身と性慾とを罪惡視するものでもなく、亦之を以つて單なる動物的生活の一性慾なりとも見ること欲せず、むしろ進んで此の肉慾の全分を神的聖なるものと是認して之をして更らに人類の文化的向上の第一義の上に効献せしむるところこそ吾人の新生の世界がある。然に吾人は果して此の意味に於て眞に永遠の生命と無限の向上とを此の人生の上に創建しつゝあるであらうか。否少くともかゝる理想と實現との上に一切の人生を意義あらしめてゐるであらうか。吾人はこゝに一大人生の飛躍が確かに必要でないかと思ふ。然らずんば我等の生命何處にあらう。

次に來るは經濟的生活の問題である。人口の希少にして生活物資の豊富であつた時代は此の問題も案外に吾人の心を引かなかつた。乍然人口の繁殖と之に伴ふ食糧の缺乏とは昔の如く經濟を考慮せずしては一日も安態なる生活ができない有様である。更らに甚しいのは如何に考へても働いても其の日の生計

さへ不可能であつて一家の生活は勿論のこと時には自己一身の生計にさへことがく者さへ出来るに至つた。茲に於て時代の變遷は自から其人々の衣食住の問題となり、更らに農工商の發達となり、勞働資本の關係も起り地主小作の爭議も起り、或は社會國家の生活中心までが主として經濟問題物質萬能の状態にまで成り了つたかの感がある。此の意味に於て前の動物的生活の時代はいつしか去り經濟生活の方面に向つて世は轉開せしもの、如く人も亦舉つて經濟物質の生活にのみ奔走しつゝあるかの様である。金錢は親子も他人と誰れやらがいつたやうに、まことに世は金錢の世の中である、一にも金、二にも金、三にも金、四にも金であつて、謂所金錢萬能主義の世界である國家社會に對する罪惡でさへ罰金といふ金で濟むに至つては如何に考へても金錢萬能の世界であるといふべきであらう。而も世は此の經濟の本質を忘れ自己の爲めの經濟なるべきを經濟の爲めの自己の如くに成り了して遂に一生を金錢の奴隷たらしめるに至つては果して之が人生の眞義であらうか。而かも之が爲めに世は苦しみ之が爲めに所有罪惡は行はれつゝあるではないか、不勞所得の富豪貴族の非人格的なるは云ふまでもない、苟も道を求め道人を説く人々に至るまで、其の内心の中心をよく案すれば此の金錢に左右せられない人々が果して幾人あるであらうか。尤も是等の經濟は吾人の生命を保存する上に於て最も缺くべからざる重要問題であるからして自己の保存と種族の繁榮とを否認せざる限り自づからは是等の經濟をも是認せざるを得ざるものではあるけれども經濟の價値は眞實の自己をして眞に向上せしむる上に於てのみ價値あるものであつて、稀も經濟物資の要求はそこに出發したるものなるを世人は何時しか自己向上の眞義を忘れ自己生命の尊さも忘れて經濟生活の上のみ自己の一生を没投するの有様なるは謂所主客轉倒の矛盾であつて正

に金錢の奴隷でないか。尤も今日の所金さへあれば衣食住の問題は殆んど思ふがまゝの生活ができ一度之を缺けば殆ど夫等の生活に於て之ほど困乏のきはみはない、夫故に世人が日夜此の金錢の問題に没投するといふことも食はずに居れない今日に於て一面人の生きんとする上からは又止むない點もあるべきであらう。

乍然靜かに人生の一生を顧みて吾等が一生を思ふ時、我等は日夜此の金錢經濟の問題にのみ没投するといふことが果して人生々活の幸福なものといふべきであらうか、否少くとも私としての現在の自覺によれば之ほど哀れな又つまらない、生活は無いかと思ふ、若し金錢の問題が意義をなす場合ありとすれば夫はいつも人類生活の安定となり、人類文化の向上發展に資するといふ點に於てのみ之を意義あるものとして是認するに過ぎないものであつて人生の爲めの金錢、經濟であつて、經濟金錢の爲めの人生ではないといふことである。而して此の二者の轉倒はどこまでも吾人の反省せねばならない所である。然るに世人往々にして此の理を悟らずともすれば金錢萬能主義を尊奉するものあり、或は金錢無用論を主張するものあるは何れも其の極端に捕はれたものであつて此の二者の上に於ける正見の第一義を忘れた見方といふべきである。乍然若此の二者の中何れをとるかとなればもとより吾人はどこまでも金錢を超越して眞實人生の價値の上に進むべきである。

而も世は金錢のみの世界ではない、人類生活の情愛、春夏秋冬の風光を通しては永遠の生命と無限の向上の世界がある。而して、人類向上の戀愛の世界には更らに大なる如來の佛界が伺はれるではないか、金錢は人生のものではない、經濟は正しい意味に於てのみ人類文化の補助をなすに過ぎぬ、而かも經

濟が人類の中心ではない、永遠の生命、無限の向上、そこには金銭經濟の手の届かぬ世界がある。永遠の生命、之なくして何の人生ぞや、無限の向上、之なくして何の向上ぞや、吾人は已に自己の一生を貫いて人生の行路を静かに考察し來る時、そこに永遠無窮の生命と限りなき人生向上の開け來るを知る。永遠の生命とは不死の自覺である、無限の向上とは價値の生活である。時處位に即した永遠の生命、そこに限りなき人生の慰安と力との世界がある。時處位に即した無限の向上、そこに人格の生命がある。人はパンのみにて生くるものにあらず、神の心に生き、如來の心に生くるところそこに永遠の生命があり、そこに眞實の向上がある。戀愛も單なる性欲の奔逸にのみ任かすならば夫は動物的生活に外ならぬ、永遠の生命と無限の向上とを中心とせる人類生活にあつてこそ、男女の關係も初めて神聖となるではないか、否當に戀愛のみならず、一切の生活、一切の經濟皆悉く此の意味に於て初めて永遠の生命と價値の生活とが現はれて來るのである。之を第三の生活謂所精神生活といふ。

然り而して此の永遠の生命と無限の向上とを少くとも吾人は釋迦孔子基督の上に見る。彼等が如何に自己の身に於て淡泊無慾一身を獻けて衆生救濟に立ちしかは彼等の一生が之を示して餘りある。

乍然讀者よ、吾人は徒らに此の理をかゝる千古の古人の上のみ見て満足するものではない。否少くとも吾人の本心は更らに進で之を自己の本心に求め、更らに自らの生活の上にも此の永遠の生命と無限の向上を體現せんと努力するものではないか、而して未だ之を得ざるものは之を得んことにとめ、已に得たるものは更に之を實現せんことにとむ。そこに眞實の生活あり、そこに永遠の生命がある。而て新生の世界はこゝに開け。神人の生活はこゝに始まる。

然ば永遠の生命とは何をいふか、價値の生活とは何をいふのであらう。佛教でいふならば即ち如來に生きることである。而て基督教で云ふならば神に生きたるといふことである。孔子の教へで云ふならば天の心に生きるに外ならぬ。孔子は常に天を祚つた、そうして彼は其の道に従ふた、基督も常に神に祚つたそうして彼も其の道に従ふた、佛陀も亦然りである、釋迦の道行きは少しく前二者と其の趣きを異にするものがあるやうであるけれども自己の本心本源を宇宙の本體たる如來に求め、自己を眞如の表現として宇宙の本心の本心として立ちたるるところそこに佛凡不二の顯現がある。更らに吾人よりして之を望むれば宇宙本心の顯はれとして如來を見、之を中心として如來に歸命し、其の歸命の心より此の如來の心を心として一切世間の衆生救濟に立つ所そこに宇宙と共なる生命と宇宙理想の體現たる價値の生活を完成することになるのである。

更らに詳論すれば天とは何ぞや神とは何ぞや佛とは何ぞやとの問題も起るであらう。乍然夫は暫く他に譲り、吾人は宇宙と共に不滅にして宇宙の生命と同體なることの自覺に入る、其の時我等は永遠の生命に生き、宇宙と共に宇宙の心を心として如實に立つ所そこに如來と共なる價値の生活がある。如來は宇宙の本心である永遠の生命と無限向上の本源である、故に吾人は此の如來に信賴し此の如來に歸命して一切を如來と共に生き、如來の中に立つのである。そこに眞生の意義開け、そこに新生の世界が來る。(一一、五)

廢物利用の文化(一)

京都 中井常次郎

石炭の使用法が今日の如くに進歩しなかつた時代には、タールの捨て場に困つたと云ふことである。けれども今は、その眞黒で、物を汚し悪臭を放つタールから幾百種かの美しい染料が取られ、有益なる薬品が幾多、産出されるやうに成つた。又製鐵術の幼稚な時代には、鑄鐵爐の廢物なるスラグの捨て場に困つたのである。毎日多量に出来る此の廢物を所理する爲に少なからぬ費用を要したのであるが、今日は此のスラグからセメントや保温料などが産出されるやうに成つた。又トンネルの工事に際し新式の機械と巧妙なる技術とを以て時代の先驅者として工事に着手した人が、幸運にも岩質が意外に工事に都合よく豫想外の成功と収益が夢想される場合にも其の廢物なる岩片の捨て場、若しくは利用法に注意を缺いた時には工事完成のまぎはに成つて莫大の利益が急轉して多大の損失に決算される事がある。彼の土木工事に行はれる、

カッティング、パンキングの理は最小の努力即ち最底の資金を以て廢物を利用する理立法である。植物が葉より炭酸を取つて、炭酸を放出し、動物は酸素を取つて血液を清め、炭酸を放捨する。

又動物は新鮮なる野菜や果實を賞味し以て身を養ひ、人は心を大御親に向けて常樂の都に焦れる而して身を養ひたる排泄物は植物に利用されるのである。即ち植物は動物の廢物を以て根幹枝葉を伸長し、天然を美化し人の眼を喜ばしめ、動物に養物と住居とを供する。草木は天恵を受けて成長し、鳥獸は花に戯れ、樹下に息ひ、天地と共に法身の說法をなし、微妙、甚深の玄義を説く。靈性開發せる人々は分に應じて妙法を會得し、法悦を味ひ大御親の榮えを表はすのである。

つらく考ふるに今日の文化は全く汗と涙の甚大なる犠牲の結晶である。換言せば信仰なき衆生は、解脱を念ずる人の捨離する煩惱と云ふ廢物を食ひ、汗を流して幸福を追ひ求め、涙を以て空亡なる幸福の後影を見送る。此の間、種々様々なる便利巧妙の利器が案出される。一たる鵜か淵に沈

んで魚を追ひ、咽喉を縛られたる綱に曳かれて飼主の前に獲物を吐き出さしめらるゝ有様を人の渡世の上に見られる。學者は研究室に立て籠り、職人は工場の塵に汚れ、商人は狂氣の如く忙がしく農夫、武士、社員皆夫々煩惱に首を絞められ幸福の幻影を見て、日夜苦心、焦慮して空しく月日を過せしが、淺ましさを反省する人は稀であらう。然るに

如來の大悲

は三世十方の聖者を通して、無明の吾等に生ける光明を示し、煩惱なる廢物の成産、汗と涙との結晶なる利器を正用し以て、六道流轉の連鎖より速に脱出し、眼を高く、心を清く澄まして如來大慈の甘露を味へと教へ給ふやうに感ずる。靜に案ずれば名利は争鬭の種である。武人、名利に溺るれば汚名を流し、作戦意の如く行はれず。軍費は徒らに高まりて多くは負戦に終らん。農夫は利に走りて天恵を忘るれば身の勞れを倍し、心の平和を亂し、家庭の平和を缺き、小作争議に参加し曠蕪の火中に身を焼くに至る。又利に急ぐ工業家は品

質を擇ばず、工作に入念を缺き、瞬利を納むるに旨し、其の結果、信用を失ひ自ら商品の販路を枯渴せしめ、使用者の中に小言の種を蒔き下す。商人も亦、利を旨とせば人心を混亂せしめ、鬼を作り、餓鬼を生み、修羅道を現出する。

僧侶が名利に走れば、如來獅子身中の虫となりて大罪を犯す、是れ犯罪の最大深重なるものであらう。何となれば同利僧は不淨說法によりて如來の大悲を空しくし、大慈の寶を衆生の手より奪ふて、彼等を永劫に三惡道に追放するからである。

世には自ら盲者なるに氣付かず五官の天地に月日を空しく過す人々ありて六道輪廻は空論、兒戲の道話と見る。恐るべく歎くべき事である。誰か盲者に色彩を説いて納得せしめ得た人が有らうか。佛説を尊ばず自ら道ありと信ずる者、食ばずして味はれぬと苦しむ者、道を聽いて怠る徒輩は信仰に於ける盲者である。一應の説明は言葉によりて出来得れども、色彩の真相、法悦の妙味は、目を開き、道を辿る者にあらすば了解されるものではない。盲人蛇におぢずして僧侶は名利に陥れ

ば、億劫の間、苦海に泣き、やうやく人間界に生れ得たと云はるゝ吾等衆生を再び底なき淵につき落すことになる。名利の毒に犯されたる僧俗、僞信者の罪の恐るべきは殺人、強盜の犯罪の比ではない。法律は此の極悪人を罰し得ず、道徳は眠りて空しく彼等に法衣を許し、袈裟を着けしめて衆人の上席に置けど、神聖なるみ親は如何に罰し給うか戦慄を覺ゆる。(つづく)

捨石

東京 小笠原金亮

築堤の工事。出来上つてからのあの立派なコンクリートのブロックなり、何千頓と云ふベトンの威大さも、其力あるは基礎をなしてゐる形も小さく見榮えのせぬ、幾千幾萬の捨石であります。捨石は決して無駄なものでない、これがあつてこそ初めて荒波を防ぐ、あの港灣の防波堤や護岸工事の威大さが生れ出たのであります。

自分に過去に犯した罪なり、なすべき事をなさ

なかつた罪なり、かうして自分の過去に造つた罪惡が又別の意味で眺められる様になつて來ました。醜は醜なりの偽はらぬ美しき姿、美は美としての完全なる相、共に莊嚴なる有難い思召しの賜物と思ふ時、私達が日々の苦患を源として刈り取らうとつとめてゐた無數の惡も、事實善に趣かせんが爲めのみ旨の賜である。弱き身の一身を捧げて如來に、どうぞ救はせ給へと慈悲に絶る時お念佛の内に心寛如として何とも云へぬ涙ぐまれた心の安らかさを感じます、此境致に發奮さして頂いて、今や、惡と考へ苦を與へ給ふたとした處のものも、皆相を變じて有難い如來の大慈悲を信せられて來ました。

今日迄安心立命の體得を徒らに科學に求め、又封建的傳統的の既に生命の枯れはてた舊道徳と云ふ可きものに探してゐた事は愚でした、靜かに深く自己の内觀の見極めを通して宇宙の根本精神を體得し、永久に不朽なる意義ある生命を築かねばなりません、先日「念佛が足らぬのですね」と申された事を思つて懸命に念佛申して居ります、そ

して如來のみ胸を吾心として行動したらと願つて居ります。人として又佛として執る可き大道が、今や嚴然として私の前へ開けて來ました。

私の信仰道

大阪 小幡空越

私は元來眞宗の家に生れ、父母は又無二の眞宗信者でありました。私は次男で行く行くは親の元を離れて一家を起さねばならぬ處から、両親は子供の間に信心を耳に入れて置かねばならぬと私の爲めに大變骨折られました。それが爲めに私は極幼少の頃から眞宗の説教を寺や説教所で聽聞し、いつとは無しに法門が非常に有難くなり、誠に愉快で愉快で堪へられぬ様になりました。前生如何なる佛縁深き者が雪の降る日も、炎熱身を焼く大暑の折も、風雨晝夜を論せず十年一日の如く參詣を怠りませんでした。身につらく感ずる時は猶更ら親鸞上人の御苦勞や、如來のお慈悲を泌々と思出されて勇氣百倍したのであります。一日母が

某寺に參詣せられし時、講師が説教の序に感心な子供として私の熱心な事を坐の集俗に話されたそうです、それで母も却て赤面したと二十何年後の今日聞された位です。五六歳の頃には毎度導師の様な積りで私がお勤めを致しました。時に小刀で佛像を刻む眞似をした事もあり、御名號を寫して見たり、御繪像を畫いて見たりした事は度々で、庭前の大石小石残らずに如來の繪像を畫き近所の友達を集めて、此に禮拜させた事もありません、又自分が高坐上につた積りで夢中に説教して見た事など皆今尚ほよく覺えてゐます。

此處譯て親の丹精から私自身も發心し、父母も稀な子であるから出家させるが善いと云つて居られました、が其後すぐ奉公に出で、恰度十七八歳の頃でしたか一日歸宅して見ますと、母が頻りと念佛申して居られます、どこか様子が違つてゐるどうした事かと聞き質して見ると、母は意外にも「私は淨土宗になつた、お前に云へば眞宗の安心堅固で承知する氣配はあるまいと時節の來るのを待つてゐた」との答です。私は此藪から棒の返事

二人舟で川中へ突出された様な心持になりました。私が常々思つてゐたのは淨土宗は自力宗で、念佛の數を稱へて往生するのであるから、眞の他力は法然上人から親鸞上人へ傳はつてゐると信じてゐたから、是れは一大事、一つ宗論して元の眞宗に歸さなればと決心して、それから母と宗義安心を戦はせました。母は私にお前は阿彌陀經を如何様に思つてゐるかと言はれました。私はつくづく考へて見ました、幼少の頃から覺えてゐるのを辿つてよと「若しは一日、若しは二日、若三日、若四日、若五日、若六日、若七日、一心不亂ならば云々」と云ふ文を思ひ浮べました、あゝ此れは眞宗の間違らしい、經卷は釋尊の説き給ひしもの故間違のある筈が無い、念佛を忘れてゐたのが非常な誤りらしい、今迄固く信じてゐたのが全部空になり、何れを信じて良いやら丸切り解らず全く途方に暮れて了ひました。實に此時の私の悩みと迷ひは逆も名狀出来ません、全ての宗教を信じたく無い様な氣になつて方向に困つて了ひました。彼の澤山の眞宗信者が皆一樣に異安心と云ふ

面壁獨語

近來の傾向が既成宗教に見切りを付けて他の方面、殊に文藝方面に求道心を満足させやうとして居る事は、正に宗教改革の時期に近付きつゝある事を語るものではないでせうか。兎に角、人生を上ツ面丈けて無く、深刻に考へて見る人達の多くなつたと云ふ事は確かに宗教の領域が廣げられたのであると思はれて、禱しくは感ずるが又一面、因襲にのみ捉へられて長夜の夢に一寸も醒めぬ人、物質以外には目の無い聞提の輩、同じく宗教を談ずれども功利主義に落ちて居る者、同じく信仰に入れりと稱し乍ら轉倒の生活をなせる徒弟、擧げれば滔々として闇黒の世界斗りかと思はれます。御上人が慈光宣傳に聲をからし、正に眞人の進む可き道を指し示されても小目的にこだわつて、二乗三乗、否な否な數乘に低められて居ると云ふ事は、三千年已前釋尊在世時代を遙かに追憶して悲痛なる感に打たれます。翻て私自身の上を眺めて見ましても他人事ではなく自分の過去が亦

事を知らずして信じ切つてゐる事は、由々敷一大事と考へました。眞宗で八釜しい法然上人の大原問答の際、信の座と行の座との立教の事を以て母に詰め寄つて見ますと、母は又、それは眞宗で勝手に造た事で大原問答の筆記には絶対に無いと答へられました。さあ斯うなつて來ると益々宗教と云ふ者は何等價値の無い一の方便であると思ひました、到當何宗を擇ばず一切信ずる事を中止しました。そうすると今度は今迄信じてゐて心も明く、氣丈夫であつたのが一度に眞闇になり、不安となつて一歩も踏み出す事が出来ません、初めから宗教を信じてゐなかつたら此様な迷苦はなかつたらうにと思はれますが、今となつては全く抜き差しも出来ぬ様になりました。

そこで色々な宗教を自分の腹で一順考へて見て何れに方向を定めたら善いかと眞剣に初めました。(つづく)

斯くの如き有様であつたのであり、將來と雖も反省の羅針盤を手離なす事は出来ません、茲に私の燃ゆるが如き修道體驗の要求——心の欲するところに從て矩を逾えず、俗諦即ち眞諦、眞諦即俗諦たる理想實現の淨土が建築せられなくては眞の満足が得られません——があるのですけれども遅々として進まず、力足らず、本當にやるせない思斗りであります、私のよくなる事は他のよくなることとであり、他のよくなることは即ち私のよくなる事であるのに、他も仲々善人ならず、私もちつとも良くならぬ、實に悲しい事です。たゞ念佛によつて向上させよう。(辨康)

□ 絶るとか頼るとか云ふ様な事は最も弱い奴の云ふ事だ、何んで自分の力の不足を人にまで、負擔させるのだ、俺には祈りなんて不必要だ、俺は俺であるだけで充分だ、俺の本有相を自ら禮讃する——と。そうですか、絶りまかす事の出来る人は最も弱い自己と知り得た最も強い者の態度ですよ。自分の力を信ずるとは自分の弱點をも本當に

知つた人の事です。他力を信ずるとは最大の己れを知つて、それが又最小の身なる事を痛感し得た後の事です、自分を知り抜いて初めて他力に縋ると云へます。難信之法と云はれるのは其の爲めです。もつと自己を強く信じて下さい、それが他力へ急ぎつゝあるのです、執見の殻を脱ぐ時が吃度齎ります。そして最下最劣に住したとき無限の如来のみ肌を觸れて最大に迄昂張せられる事を覺信しますから。(魁)

■み佛を拜み奉りて

眞野鶴松

我をたのみくしきみ法を疑ひつみ旨いためしことのくやしき
中空にみ佛獨り在す見ゆ開たる目も閉じたる目にも別河沙のみ佛拜み經文の不審の雲は終に晴れけり
み佛の御裾に住める人の皆おごれる様ぞ見憎く覺ゆ

讀者の友へ

觀道

斯して「眞生」が生れてから丸一年になりました、此間皆様にも色々の出来事がお出来でせうね、色々の喜びや悲しみや其他人生の吉凶も定めし多い事かと存じます。乍然私共は此間人生の一生に於てどれ丈意義ある生活をした事でせう。「一度過ぎて又と歸らぬ人の一生を」と深く考へて來る時、轉々回顧の念に堪えぬものがあります。
乍然斯して「眞生」、毎月皆様の前に提供せられて幾分づゝでも如來中心の慈光生活が營まれる事かと思へば又限りない人生の喜びであります。
願くは此の誌を通じて皆様の宗教的實觀をも御發表下さいませ、而てお互に幾分宛でも眞實の生活を上にも建設しやうではありませんか。
遙かに過にし昔の數々を心に浮べて、皆様の温顔極り無き其の御姿を今も尙昔に變らず思出しては上なき法の友として、日夜に喜んで居りますよ。
時には獨り居て淋しい時、念佛申ては皆様を心に浮べ他愛もなく懐かしく慕はしく戀しくて我知らず涙のこぼるゝをさへ覺ゆる事が度々です。

新しき年を迎へ入無量壽光の如來に感謝し奉る
一月元旦 名古屋市中區梅川町梅香院

吉水文雄

南無阿彌陀佛 一月元旦 内海健郎 山崎健藏

謹賀新年 一月元旦 鎌倉大佛 道殿

謹賀新年 一月元旦 十劫寺 吉水辨道

賀正 本年も相變らず同友諸氏の御指導を願ひます 又來る四月十一日より一週間昨年の通り御上人御指導の下に別時を勤めさして頂きますゆへ御参加下さいませ 一月元旦 美濃 行基 寺

謹賀新年 大阪 藤田高印

賀正 一月元旦 伊勢桑名 久保田領太郎

皆さまおめで度う

南無阿彌陀佛 全國光明會有志一同 眞生社 一月元旦

寄贈並誌代拂込氏名

- 寄贈○十圓 田中木又先生 五圓
- 井戸武次郎様 戶松學映様 六圓
- 四十錢 渡部眞戒様 ○十圓 鷲津太七様 大阪光明會殿 眞松院様
- 五圓 鎌倉轉法輪寺様 ○三圓 大音寺様 ○二圓 三次六兵衛様 鈴木綱五郎様 吉水文雄様
- 誌代各一圓 中川茂市様 横田九三太様 前田えい様 榮照寺様 安養寺様 市山圓照様 西成昇孝様 龜田松太郎様 森本源之助様 小川幸七様 和田靈心様 村井亮殿様 三浦辨定様 金坂佃衛様 寺内時二様 吉水大信様 吉田淳誠様 武井はつ様 宗石司様 梶川國武様 澁谷様 ○一圓 五十錢 綾部康雄様 ○六十錢 竹内倉吉様 ○十二圓 渡部眞戒様

念佛三昧會

□日時 一月八日午前四時より一月十四日午後九時迄九七日間

(三時間宛毒日四回念佛、休憩時に於ける雑談を御断り致します) 夜信仰座談會

□會場 静岡縣清水港實相寺(江尻驛より約一里)

□導師 土屋觀道師

□食事 朝小事。晝夕飯食(間食等御断り) 僧俗能所共會費一圓。食事一回貳拾錢。宿泊一回二十錢(寢具持參者不要)

□役割 抽籤又指名

主催者 中村辨康

▲編輯の後に

□年末は印刷所の引受が早いので、経費の點から表紙などに思切つた裝禎改革を断行せられなかつた事を厚くお詫いたします。年賀廣告も原稿を八日にしました為め其後の到着分は終に應じられませんでした。悪しからずお宥しを。

□慌はただしい年暮に、正月の氣分で書いてゐると地獄で佛の説法をした様に、なんだかくすぐつたい氣持がいたします。獲らぬ狐の皮算用で獨り其氣になつてゐる全く正月なんて何處にでも轉つてるもんですね。

□やつと忘れた、今年はや特別に勉強しますから、どうぞ御導を。

振替口座東京四七貳八八番眞生社
大正十一年二月二日第三種郵便物認可
大正十二年一月一日發行(毎月一回一日發行)
定價一部十錢 半年六十錢 一年一圓

編輯兼 東京市芝區芝公園第十四號地九番
發行所 土屋觀道

發行所 東京市神田區駿河臺袋町一番地 眞生社

印刷人 東京市外西巢鴨町二七二番地 原子廣 宣

印刷所 東京市外西巢鴨町二七二番地 無我山房印刷工場

大正十一年二月二日第三種郵便物認可大正十一年十二月三十日印刷納本大正十二年一月一日發行(毎月一回一日發行)眞生第二卷第十二號